

# 福祉 ちば

No.145 2009.3.31発行



患者の人生にも思いを馳せて—。

●一人ひとりのニーズに応えたい!



地域の福祉、  
みんなで参加

赤い羽根  
共同募金

「こんにちは、その後いかがですか？痛いところはありませんか？」。医療機関を退院したものの、寝たきりで通院が困難だったり、自宅で最期を迎えたいと希望する患者さん宅を訪問、介護にあたる家族とじっくり話し合い、より良い今後のケアを考える—。

松戸市では、そうした患者さんの尊厳を守り、一人ひとりの人生にまで思いを馳せた治療に情熱を傾ける在宅医療が展開されています。

患者さんのお宅に訪問した際には、家族の介護疲れにも気配りのアドバイスをしたり、日頃から患者さんの容態の急変に備えて、高度医療に応えられる病院とも緊密に連携、患者さんとその家族からは「住み慣れたわが家で、安心して療養生活ができる」と喜ばれ、そこには医療という領域からの新しい〈地域福祉〉が息づいています。

(詳しくは8ページをご覧ください。)



編集・発行 社会福祉法人千葉県社会福祉協議会

〒260-8508 千葉市中央区千葉港4番3号 TEL.043-245-1101 FAX.043-244-5201 <http://www.chibakenshakyo.com>

この広報誌「福祉ちば」は、共同募金の配分金の一部によって発行しています。

千葉県ボランティア・市民活動センターは、誰もが、自分らしく、この千葉で暮らし続け、ともに生きる福祉社会を形成する主体として市町村のボランティアセンターをはじめ様々な団体や機関とのネットワークを図りながらボランティア・市民活動の推進・支援を行っています。

# 発揮しよう！市民パワーの底力

## ボランティア・市民活動リーダーシンポジウム

ボランティア活動、市民活動の先進的な事例を学び、地域の担い手としての活動に活かそう——と、2月4日千葉県労働者福祉センターで『ボランティア・市民活動リーダーシンポジウム』（千葉県社会福祉協議会主催）が開かれました。ノンフィクション作家で評論家の柳田邦男氏による基調講演「ボランティアが社会を変える」に続き、パネルディスカッションでは市民活動の様々な先進的事例が発表され、県内のボランティア・市民活動のリーダーらが熱心に耳を傾けました。

### 基調講演

## ボランティアが社会を変える(要旨)

ノンフィクション作家・評論家 柳田邦男氏



柳田邦男氏

様々な人との出会いを通して感じた、今のボランティア活動についてお話したいと思います。

少年時代の医療ミスで重い脳障害が残りましたが、本人の努力とボランティアの支えで、大学を見事に卒業し、分厚い卒業論文を完成させた人がいました。彼の勉学を支えたのは、学生仲間による支援。本人の情熱とそれを支えた仲間たち、そして母親の深い愛情が、新しい世界を拓いた出来事です。

阪神・淡路大震災の災害支援ボランティアで、仮設住宅で孤独死防止のため必死に取り組んだ活動からは、ふれあう場所と常時支えるボランティアが必要——ということを学びました。また、震災を機に、神戸市に沢山のボランティアグループができました。医師や看護師などの専門家や、ボランティアの重要性に気付いたのも、震災の時でした。

札幌では、筋ジストロフィーの中年の患者さんを80人のボラン

ティアが最期まで在宅で支え、夜中でも遠慮なしの要求にボランティアたちは辞意させられましたが、亡くなった後の一致した感想は「こちらが学ばされた」でした。

病院やホスピス、在宅ケアに係る新しいボランティア活動として、「音楽療法」、「傾聴」、「聴き書き」などの活動も広まっています。施設や自宅で暮らす高齢者を訪ね、お話を聴いて小冊子にまとめたり、同じグループの別動隊がユニークなグループホームを運営しています。末期ガンの患者や認知症の高齢者を引き受け、きめ細かな支援で成果を挙げています。

病氣と闘う子供たちのための「遊びのボランティア」も素晴らしい発想です。ゲームなどバーチャルの世界で子供たちが、スキンシップや感動を味わうことは大きな意味を持ちます。

これらのエピソードから、人間への限りない興味や愛情が、ボランティア活動への持続力を高め、効率主義・成果主義が支配的になっていく中で、それらに支配されないもう一つの生き方がある——と気付かせてくれました。

### パネルディスカッション

## ボランティアが創る！支える！これからの地域社会(要旨)

### 地域社会再生のため、路上を見渡す

特定非営利活動法人市川ガンバの会 理事長 副田一朗氏



副田一朗氏

路上生活者が減らない現在、その支援に有給スタッフ7名で〈路上死ゼロ〉〈孤独にさせない〉を目標に活動に専念しています。

私たちは、ホームレスを“ハウス＋ホームを失っている”人と理解し、物理的・精神的両面から支援しています。日常の支援に加

え、葬儀や追悼会も行っています。自立支援住宅を運営し、生活保護によって170人が民間アパートで生活できるようになりました。

今まさに地域の再生が必要であり、地域の誰もが通えるコミュニティをつくらなければならない。私たちの活動は、リーダーシップが問われるとともに、地域中核支援センターや司法書士などと連携を取ることが必要です。

スタッフたちにいつも言っているのは「夢は語り続けなければいけない」ということです。最後は、ガンバの会が必要でなくなる社会であって欲しいですね。

### 平安町会の住民パワー

横浜市鶴見区平安町町会・平安町福祉賛助会 会長 河西英彦氏



河西英彦氏

平安町町会は、町内会と福祉賛助会が両立しているところが特徴。福祉賛助会では、主に高齢者・障害者・子育て・環境に関する活動を行っています。

「ランチへいあん（配食サービス）」では子どもたちが、「へいあんキッズルーム」では高校生がボランティアとして参加しています。町活動の基本姿勢は「タイムリーな活動の実行」であり、市民の関心が福祉から防犯に移る以前に、セキュリティネットワークも立ち上げました。活動の展開には行政・社会福祉協議会・ボランティアの「協働」が必要です。

町活動は、人の生活のすべてに目配りが必要。点から線へ、線から面へと広げ、一人ひとりを守っていくということです。

### 人の命と尊厳を守り、人々の“生”の回復のために

千葉県赤十字防災ボランティア リーダー 朝野明夫氏



朝野明夫氏

赤十字の重点活動は、地域福祉活動、防災と災害救護活動、赤十字思想の普及。防災ボランティアリーダーの養成講習などを行い、市町村を中心とした組織の再構築に取り組んでいます。

地域福祉活動が防災に役立つことは、阪神・淡路大震災での北沢町の事例で明らかです。「防災力」の素は〈人手〉〈道具〉〈情報〉。隣近所の人、家庭にある工具類、隣近所の詳細な情報です。

2年前までは「ここだけは地震はこない」（笑）と言い切る人がほとんど。しかし、現実には〈ここにも大地震は起こる〉のです。千葉県でも災害ボランティアのネットワークが構築されましたが、災害には、向こう三軒両隣の関係が何よりも大切です。

### コーディネーター：まとめ

### 若者たちが未来に希望を持てる社会に

法政大学現代福祉学部 教授 宮城孝氏



宮城孝氏

全国平均の高齢化率が、2015年には26%（現在は22%）、2025年には30%を超えます。独居老人、老々介護、認知症、障害者の地域での自立した生活など、地域の福祉問題が非常に重要になっていくでしょう。そして一番心配なのは、若者たちです。今、

若者が未来に希望を持てる社会になっているのでしょうか？これまで福祉というと、高齢者や障害者だけに目が向きがちでしたが、若者が希望をもてる社会に向けてのボランティア・市民活動の必要性も切実に感じています。

日本だけでなく、世界が大きな変動期を迎えています。私たちが「どう生きていくのか？」と考えることが、ボランティアにつながるのではないのでしょうか。行政機能の不足を補いながら、住みよい地域社会を目指すボランティア・市民活動の役割が、ますます重要だと思っています。

## TOPIX

## 「進路を〈福祉〉に決めた高校生の話」

一生を託すことになるかもしれない就職だから、やって楽しくなければ——と、子供好きの高校生が〈おもちゃ図書館〉でボランティアを体験。幼児とのふれあいの中から、「いつか福祉のスペシャリストに」と確かな夢を描き、福祉専門学校への入学という新しいスタートを切りました。

### 「やって楽しい仕事を選びたい」

●鈴木康太君（千葉県立松尾高校3年）

我が家は親戚が多く、お正月ともなると大勢が集まります。そんな時、子供の遊び相手をするのは僕の役割で、そのうち何故か子供好きの人間になっていました。

高校2年の春を迎えた昨年3月、自分の進路に迷っていたのですが、保育園の先生をやっている親戚の人や、両親からも「お前の性格を考えると、子供の世話をする仕事が良いのでは…？」といわれ、市のボランティアセンターに相談したら「おもちゃ図書館」のボラ

ンティアを紹介してくれました。

そこで、4月から約1年間、山武市内の上横地（旧成東町）の「おもちゃ図書館びよびよ」と、松尾町の「おもちゃ図書館まつぼっくり」で、月1回のボランティア体験。その間に、保育園でのボランティアや、「おもちゃドクター」の講習会に参加してきました。



幼児と遊具を通じて一緒に遊ぶのが、現在のボランティア活動の中心ですが、「おにいちゃん、おにいちゃん」と子供たちに慕われたり、保護者から子育ての秘訣を教わっている日々を通じ、徐々に進路が固まり、その結果、「保育士」を目指して成田国際福祉専門学校への進学を決意しました。その後は、とにかく「好きな道のスペシャリストになるために頑張っていきたい！」と思っています。

# 新たな地域社会づくりに向けての私たちの提言

## ～菜の花コミュニティプラン2ndステージと社会福祉協議会の活動に求められるもの～



障害があっても、認知症となっても、誰もが、自分らしく、この千葉で暮らし続けることができる地域社会づくりに社協としてどう貢献できるかをテーマに、県社協の今後3年間の行動計画を示した「菜の花コミュニティプラン 2ndステージ」が策定されました。

当プランは、地域福祉（活動）の中核を担うことが求められている市町村社協の様々な活動を県社協として強力に後押しするとともに、「地域の様々な課題の解決に向けた関係機関・団体等によるネットワークづくり」と「利用者中心の福祉サービスの実現に向けたシステムづくり」を、緊急に達成すべき行動目標として掲げています。

今回の特集では、「住民自らによる地域社会づくり」を地道に応援し続けている県内2つの社協の地域福祉担当職員にご登場いただき、「誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせる条件づくり」に向け、社会福祉協議会は何をなすべきかを軸に、今後の社協活動に求められる視点や活動目標について座談会方式で意見を交換しました。

### 地域福祉充実のキーワードは関係機関のネットワークづくり～危機感持って全員が参加

千葉県社会福祉協議会 総務部副部長 川上浩嗣

“2ndステージ”は、『21世紀菜の花コミュニティプラン』（平成16年策定）を事務局職員全員で評価し、達成率を認識した上で、ステップアップしたプランとして作成されました。

その方向性は、(1)協働・協創機能の強化 (2)包括的生活支援・権利擁護機能の強化 (3)福祉人材の確保・養成機能の強化 (4)福祉サービスの質の向上機能の強化 (5)情報提供機能の強化——に集約されます。これらの機能強化が、県社協の専門性を高め、市町村社協を支援していくことになると考えました。

このため「県社協としての専門機能を強化しないと生き残れない！」という危機感を持ち、事務局職員全員が作業部会に関わり、重点事項に絞ったアクションプランとして作成。PDCAサイクル(\*)による進行管理を行い、達成率100%をめざし政策調整委員会が毎年評価を行っていることも大きな特徴です。

作ったからには実行し、達成しなければなりません。実行できれば、3年後の県社協はレベルアップし、市町村社協等からの信頼度も高まっていくでしょう。それを確実に進めるのが、私の使命です。

(\*) P (PLAN) D (DO) C (CHECK) A (ACT) サイクル

### 人とのつながりを大切にしたい！

御宿町社会福祉協議会 係長 貝塚克之氏



貝塚克之氏

市町村社協の担ってきた役割を振り返ると、住民活動を中心に、地域の様々な機関や団体、当事者等が総がかりで地域福祉活動を盛り上げようとした1970年代後半から80年代後半にかけての〈地域ぐるみ福祉〉の時期から、1990年代の在宅福祉サービスを中心とした〈事業型社協〉の時期、そして、その後介護保険の導入により〈介護〉と〈福祉〉が分離し、社協が事業者としての位置づけも併せ持たざるを得なくなった今日と、社協の現実の機能は時代とともに変化しつつありますが、〈地域福祉を担う団体〉という社協本来の役割が変わったわけではありません。ただ介護や事業の占める比率が増したことで、“困った時の社協”という意識が自他共に薄れているのでは

ないかとの印象があります。

地域福祉の基盤をつくるのが社協の役割。それがきちんとできている社協と、置き忘れられた社協があるのだと思います。一方で、介護保険スタート時の頃から、社協同士のつながりや、ネットワークが薄れ、個々の社協のある意味での“孤立化”が目立ってきました。

地域の課題は多彩で、問題により支援するネットワークの大きさも様々。いかにボーダレスで対応できるかがポイントになります。“2ndステージ”には、〈コミュニティソーシャルワーカー (CSW) の育成研修〉が盛り込まれています。CSWの役割は、社協職員個人としてではなく、社協組織として担うものでもあります。要支援者の地域生活支援のための専門性と、みんなが暮らしやすい地域社会づくりに向けた条件整備を担う専門性——その両面を担うのがCSW。支援が必要な人を取り巻く人材と連携していくことで、その役割を全うしていけるのではないのでしょうか。ある時は〈目〉となり、ある時は〈実戦部隊〉ともなる——その時々で、CSWの役割が違ってきます。

社会福祉協議会の今後のあり方を考える時、キーワードは〈連携・ネットワークの回復〉。それを打開するのは〈人とのつながり〉です。支援が必要な人、支援する専門職や団体、社協が協力し合うということ。「何でも話し合える」ことで問題が明らかになり、即応力もできると思います。時代が変わっても、〈やるべきこと〉は変わってはいません。〈今〉という時代を見つめ、現状にしっかりと目を向け、手法を熟慮し、〈やるべきこと〉を一つずつ実現していかなければならないと考えます。

### 原点は「一人の不幸も見逃さない！」

佐倉市社会福祉協議会 班長 谷野宏輝氏

ここ数年気がかりなのが、〈暮らしの中の声〉が地区社協との間をスムーズに行ったり来たりしているかということです。地区社協ではサロン活動や訪問活動等組織的な取組みが活発なのですが、そこから沢山の暮らしの困りごとが地区社協に届いて、地域で支え合えたら……と。ボランティアセンター等で相談を受けて、私たちは地区社協や自治会圏域の中で、一緒に考えることがありますが、それらの困りごとの中には、地域で対応できることも多くあります。

即ち、今の社協に最も大切なのは地域住民の“困ったよ”とか“助けて”の声に寄り添



谷野宏輝氏

いながら応えていくこと。そのためには住民一人ひとりのニーズに対し、制度や枠に捉われずに対応していくという社協本来の姿を取り戻していきたいと考えています。

そして、高度化・複雑化する地域の課題を解決するために、様々な社会資源を繋げ、ネットワークで支援する活動は、地域を耕す社協固有の専門性といえます。当事者や周りの住民、関係機関・団体等による話し合う場をつくり、意見や情報を拾い上げ、情報を共有していくという社協職員の専門性やスキルを向上させていく必要があります。この部分を強化していく役割が、コミュニティソーシャルワーカー養成研修に望まれています。

また、同じに見える問題でも、目配り・気配りで大丈夫——ということもあれば、課題として意図的に取り組まねばならないこともあります。例えば、犬の散歩中に声をかけることで、いつの間にか地域の見守りができていることもあります。コミュニティソーシャルワークには、それぞれの地域の実情や暮らしのニーズに目を向け、その場にあわせた〈いい塩梅〉の視点を持つことが大切です。

住民同士で地域の課題を見つけ、解決のためのカタチができれば、活動のモチベーションがあがります。こうしたモデルを積み重ね、支援することが社協職員の専門性でもあるでしょう。

地域性や時代に合わせ「一人の不幸も見逃さない！」というスタンスを忘れないようにしたい。地域に困りごとがあるのは当たり前。それを地域で解決できるのが“健康な地域”と言えるのではないのでしょうか。「一人の不幸も見逃さない！」ために、地域で必要とされる社協職員はどんな人材であるべきか——を絶えず議

論し、前に進める社協でありたいですね。

### 〈社協の機能・役割〉の再検証を！

千葉県社会福祉協議会 福祉サービスサポートセンター 副部長 金子恵一

私たちの所属する社協は、体制も含め大変微力ですが、誰もが地域で尊厳を持って暮らせる地域社会を創りあげるには「どのような条件が必要か？」にこだわり続けながら実践を積み重ねてきました。しかしながら、今日、地域の有り様も実践を取り巻く環境も大きく変化しています。このような状況を踏まえ、県社協としては、我々社協職員一人ひとりが、改めて社協活動の意義を再確認することが必要と考えています。その意味において“2ndステージ”は、今後社協が取り組むべき方向についての一つの提案でもあります。なかでも個別支援と地域支援を活動の視野に置くコミュニティソーシャルワーカーの育成は“2ndステージ”の目玉商品であり、社協が社会福祉法に規定された役割や機能を発揮するためには、地域に存在する福祉課題や住民の抱える生活課題を解決するための地域住民自らの活動を応援するとともに、各種専門職や機関・団体間のネットワークづくりを応援することが大切で、それには社協職員としてコミュニティソーシャルワークの力量を高めることが大前提と考えています。常に社協本来の役割や機能を忘れず、県内社協職員共通の思いで、より良い地域社会づくりのために貢献できたらと考えています。

### 今後の地域福祉は、住民により身近な地域での福祉活動がキーポイントに ～地区社協元年 スタート～



市川市社会福祉協議会会長・千葉県社協政策調整委員会委員 伊与久美子氏

超高齢化や核家族化によって、地域社会が崩壊の危機に瀕している今日、市川市では、地域住民のつながりを強め、共に支えあう『新たな仕組み』を築くべく、市民・行政・社協のパートナーシップによる協働作戦を展開中です。

この作戦は〈公〉と〈民〉との役割分担を踏まえ、社会福祉協議会は〈民〉が担うべき福祉活動に関し〈公〉との調整を図りながら、積極的に側面支援を行うものです。

そのシンボリックな事業が、地域住民が集い、交流し、協議・協働する場である〈てらぼサロン (ふれあいいきいきサロン)〉であり、平成22年度までに市内100カ所を目指し着々と増設中です。

こうした地域福祉を進める原動力は、なんといっても市民のごく身近にある地区社会福祉協議会であり、いちかわ社協では平成21年度を『地区社協元年』と定めて、市内全域に地域福祉への理解と住民参加の機運を高め、地区社協ごとにボランティ

アの発掘、登録や住民自身による相談活動を実施し、また、活動の一環として一人暮らしの高齢者や障害児(者)などの所在を知るための〈福祉マップ〉を作成するなど、その自立性を高めていく方針です。

〈社協〉を取り巻くもう一つの課題は、社協の存在や役割を知らない市民が多く、知っていたとしても「役所の下部組織のひとつ」と思われていることです。

我々社協関係者は、〈制度の狭間・隙間に生じる問題への対応〉や〈地域の問題を地域住民自らが解決するプロセスを共に取り組みながら支援する〉という自らの公益性な性格上、従来積極的なPR活動には取り組んできませんでした。住民による身近な地域での福祉活動を進めるためには、地区社協を含めた〈社協〉の存在や役割を住民によく知ってもらうことが大前提です。

〈社協は、地域福祉を目指す全国にネットワークをもつ組織であり、社協そのものが地域の共有財産である〉ということをし、我々社協関係者は、自らをより開かれた組織にするとともに、もっともっと積極的にPRしていくことが必要と考えています。

### 地域福祉の新しい位置づけと菜の花コミュニティプラン2ndステージ



早稲田大学人間科学学術院教授・千葉県社協政策調整委員会委員長 田中英樹氏

菜の花コミュニティプラン2ndステージには、およそ7つの特徴があります。第1に、第一次プランを(事後)評価し、精査して策定した計画です。第2に、計画期間を社会の急速な変化に対応できるように3年と短く設定したことです。第3に、政策調整委員会を立ち上げて、計画の策定だけでなくその進行管理も重視しました。第4に、計画内容も総花的な盛り込みを避け、重点的なアクションプランに絞ったことです。第5に、県社協の専門機能を強化するとともに市町村社協の支援を強調しました。第6に、事業・人材・財務を地域住民の立場から総合的にバランス良くみる視点を掲げました。そして第7に、コミュニティソーシャルワーカーの養成と配置を重視したことです。

また、この2ndステージは、地域福祉の新しい位置づけを示しています。1970年代からの「福祉のまちづくり」をスローガンとした在宅福祉の理念登場、在宅福祉サービスの創出、福祉コミュニティ形成への取り組みなどを経て、1990年代からの「福祉でまちづくり」を強調した在宅福祉サービスの法制化、ふれあいのまちづくり事業、福祉供給主体の多様化をさらに発展させたものです。つまり、2010年代からは「福祉はまちづくり」そのものといっても良いでしょう。福祉のウイングを広げるあらゆる取り組み、住民が主体となって創り上げるコミュニティビジネス、超福祉、地域福祉の核としての市町村社協にいつそうの期待をかけてこの2ndステージは船出します。計画内容が実現するように一緒に参加し、応援しましょう。

※「菜の花コミュニティプラン2ndステージ」は、県社協ホームページでもご覧いただけます。



福祉の仕事は、楽しさ・やりがいがいっぱい!!③

# 子どもたちと一緒に汗をかく そんなときが最高!!

児童養護施設「ひかりの子学園」生活支援スタッフ 小倉 淳さん

児童養護施設は、児童福祉法第28条に基づき、保護者のない児童や虐待児童、その他環境上養護を要する児童を養護し、その自立を支援することを目的とする施設です。今日の児童養護施設を巡っては、「親との死別」等の入所理由はむしろ少なく、親の精神疾患や虐待などの原因により家庭における適切な養育を受けることが困難な状況にある子どもたちの入所が増え続けています。施設の役割も単なる家庭の代替機能だけではなく、子どもたちへの心のケア——など、そこで働く職員には、より深い専門性が求められています。今回は、その児童養護施設「ひかりの子学園」（館山市洲宮）で働く小倉淳さんを訪ね、仕事のやりがい、魅力、将来の夢などについてお話をお伺いしました。



子どもたちと遊ぶ小倉さん

## ■この仕事を選ばれた理由、キッカケは何ですか？

今振り返ってみると、保育士をしていた母の影響が大きかったと思います。子どもの頃、休日ともなると兄や従兄弟など何人もの子どもたちを、いろいろな所に連れて行ってくれました。

そんな家庭環境のこともあって、福祉系の大学に入り、ときには母の勤める託児所へ手伝いに行き、ごく自然に「将来は子どもと係る仕事をしたい」と思うようになりました。

卒業間近の4年生の冬に、千葉県福祉人材センターの「福祉のしごとホームページ」を見て、「ひかりの子学園」に応募したのです。

## ■小倉さんにとって、一番の仕事の魅力を感じるのとはどんなときですか？

現在、私が担当しているのは、高校2、3年の男子です。夏は野球、冬はサッカー、マラソンといったスポーツを中心に、子どもたちと一緒に体を動かしながら関係を築いています。〈何でも子どもたちと一緒に〉が「ひかりの子学園」の基本方針で、運動場づくりや山を切り崩して整地し、芝を植えたり、共に汗を流しました。

こうした自らの体を使つての作業を通じて、大きな達成感を味わえ、何事も意欲的に取り組めるようになります。子どもたちも、きちんとした挨拶ができるようになり、チームワークの大切さに気付いてくれました。日々の生活の中で見えてくる〈心の成長〉を肌で感じられることが最大の魅力で、「この仕事、やってよかった!!」と感じています。

## ■仕事のうえのむずかしさ、悩みもあると思いますが…

数々の失敗も経験しました。忘れもしません、2年前の夏休み

## 小倉さんの1日のスケジュール

- 6:30 出勤
- 7:00 朝食
- 8:00 子どもたちを学校へ送り出す
- 9:00 スタッフの打合せ
- 10:00～15:00 休憩
- 15:00 子どもたちが学校から帰ってくる(おやつ、宿題を見たり、遊んだりしている)
- 18:00 夕食
- 19:00 入浴
- 20:00 小学校低学年の就寝
- 21:00 小学校高学年の就寝
- 21:30 中・高校生の夜食(学校のできごとを話したり…)
- 22:30 就寝・退勤

※週に1回、宿直勤務があります。  
※「ひかりの子学園」では、生活支援スタッフは(断続勤務)というシステムで働いています。断続勤務とは、児童養護施設で採用されていることが多い勤務形態で、施設で生活する子ども達が学校などへ出かけるまでの時間や、学校などから帰って施設で過ごす時間帯に勤務します。

に長野県へキャンプに行ったときのこと。小学生を縁日に連れて行ったのですが、ふと気づいたら人数が一人足りない。土地勘などあるはずもなく、本当に焦りました。警察にも捜索をお願いして、縁日に戻ってみたら、おもちゃ屋さんの前で楽しそうな顔付きで座っているのを発見。思わず抱きしめ、泣いてしまいました。

悩みといえば、子どもたちに何度がトラブルを起こされたことがあります。日頃の思いを裏切られて、残念で仕方がありませんでしたが、それぞれ背負ってきた環境のこともあって、その辺も分かってあげなければならず、ケースバイケースの支援は実に難しい——と実感しています。

トラブルの防止には、なんといっても子どもたちにしっかりした目標を持ってもらうことではないでしょうか? 目標がなくなると、ブレーキが効かなくなり、トラブルにつながるケースが多いのです。

## ■いつも心がけていらっしゃることは、どんなことですか？

「自然体でいく」ということですね。イヤなことはすぐ忘れるタイプですが、特に心がけているのは〈仕事と家庭のバランス〉です。そのバランスが崩れていると感じたときは、気分転換に自然の中をぶらっと散歩します。

また家族(妻と1歳6カ月の長男)と休日にピクニックなどに出かけるとも好きで、これも日々の仕事の原動力になっています。

## ■今後、取組みたい仕事や夢は？

ここに就職して、もう5年目の中堅職員となり、任される仕事の責任も大きくなっていますが、子どもたちの生活を第一に考えながら、自然体でやっていくつもりです。また洲宮地区の住民の方々は、自転車で通りがかりにひとこと声をかけてくださったり、園の畑の収穫作業を手伝ってくれたり、また野菜をプレゼントしてくれたり、バザーの際には沢山の品物を持ち寄っていただいたり——と、あたたかく見守られていることを感じて、こうした環境の中で働けるのは本当に感謝しています。

## ■現在、福祉の分野の仕事をめざしている人たちに、ひとこと応援メッセージをお願いします。

「福祉の分野で働きたい」というのであれば、いろいろな団体、施設へ行き、現場を見ることが大切です。私の職場である児童養護施設は、子どもたちと一緒に成長していける職場です。学生のうちからぜひ遊びに来て、その雰囲気や体感してください。

## 福祉施設や事業所で働きたい方

### 福祉のしごと就職ガイダンス

社会福祉施設等へ就職を希望する方を対象に、福祉職場で活躍している若手職員から、就職活動の体験談や仕事の内容、やりがい等を説明し、相談コーナーでは個別の質問にお答えします。

- (日程) 第2回【障害者福祉編】6月28日(土)
- 第3回【高齢者福祉編②】7月25日(日)
- 第4回【児童・社協編】9月26日(土)
- (時間) 13:30～16:00(13:00～受付開始)
- (場所) 千葉県社会福祉センター4階会議室

### 第1回福祉のしごと就職フェアinちば

福祉施設や事業所に就職希望している方を中心に、求人のある事業所と個別に直接面談ができます。就職にあたっての詳細な説明や施設見学等の予約ができますので、ぜひご参加ください。また、当日は福祉人材センターへの求職登録や、専門家による各種相談も受け付けています。

- (日程) 7月11日(土)
- (時間) 13:00～16:00(12:30～受付開始)
- (場所) 幕張メッセ国際会議場

■お問合せ先/千葉県福祉人材センター  
電話 043-248-1294

## 「全国健康福祉祭」のご案内

### ねんりんに 夢を大志を 青春を



ねんりんピック鹿児島2008 総合開会式

平成20年10月25日(土)～28日(火)の4日間、鹿児島県内で「全国健康福祉祭(愛称:ねんりんピック)」が開催されました。ねんりんピックは、高齢者を中心とするスポーツ、文化、健康と福祉の総合的な祭典であり、厚生省創立50周年を記念して昭和63(1988)年に開始されて以来、毎年、開催地を変えて行われています。

千葉県選手団は、高橋強一常務理事を団長とする169名の選手で結成され、卓球、テニス、水泳——などの22種目に参加し、好成績を収めました。

今年は、9月5日(土)～8日(火)までの4日間、「ねんりんに夢を大志を 青春を」というテーマで北海道で開催されます。

千葉県からも、一般公募でお申し込みされた方、各競技団体からの推薦を受けた方の中から選考された選手(千葉市在住の方は除く。千葉市在住の方は千葉県選手団として参加)が参加します。

■お問合せ先/千葉県社会福祉協議会 地域福祉推進部  
地域福祉推進班  
電話 043-245-2208



## ご愛顧ありがとうございました〈閉荘のご挨拶〉

長きに渡り当荘をご愛顧頂き誠にありがとうございました。さてこの度、平成21年3月31日をもちまして「心ふれ逢う やすらぎの宿 久留里荘」を閉荘させて頂くこととなりました。お世話になりましたお客様並びに関係各位に重ねてお礼申し上げます。平成21年4月

久留里荘 (千葉県社会福祉協議会)



## みなさん、「生活福祉資金」をご存じですか？

社会福祉協議会では民生委員と連携して、比較的所得が少ない世帯・障害者の世帯・高齢者の世帯に対して「生活福祉資金」の貸付をおこなっています。

【資金種類(例)】出産費、葬祭費、転宅費、福祉用具購入費、障害者のための自動車購入費、住宅の増改築または改修のための資金、高校・大学・専門学校等の修学費および入学の際の支度費、療養費、介護等費、被災した際の再建資金、技能習得のための資金、緊急小口資金、離職者支援資金、長期生活支援資金等

※貸付条件(貸付対象、貸付限度額、返済期間、利子、連帯保証人の有無等)は資金種類ごとに異なります。※貸付制度ですので返済の義務があります。なお、貸付審査の結果貸付に至らない場合もあります。

資金についての相談窓口/お住まいの市区町村社会福祉協議会または民生委員へご相談ください。千葉県社会福祉協議会 ☎043-245-1551

# 自宅で暮らす安心感、 快適さをそのままにした治療

●あおぞら診療所・新松戸 前田浩利院長



## 変わらぬ過酷な居宅介護の現場

わが国は、世界に類をみないほどの速度で超高齢化が進んでおり、これに伴って介護を必要とする高齢者は確実に増加中。加えて核家族化の影響で、通院介助する家族がいない。いたとしても公的な介護援助が不十分なため、過酷な環境に置かれています。

介護保険制度によって、高齢の障害者については多少改善されたとはいえ、根本的な解決とはなっておらず、〈老々介護〉〈介護地獄〉の実態はほとんど変わっていないのが実情です。

また国は、介護保険制度によって、在宅介護重視の政策を進めており、これによって各医療機関では入院患者の早期退院の方針を打ち出しています。このことがまた、居宅介護を余儀なくされる状況を生み出しています。

一方、特に重い病気や障害を持った高齢者にとって、病院での治療が一段落した後は「家族や友人のいる地域に戻って過ごしたい」「最期は自宅で迎えたい」といった思いが強く、ここにも在宅医療・介護の必要性が潜んでいるといえます。

## 患者さんの心に寄り添う〈主治医〉をめざして

〈在宅医療〉は、たとえば身体の麻痺や老衰、外傷の後遺症などで、通院が困難な人、退院後で病状が比較的安定しているが、長期の療養が必要——という人を対象としており、いってみれば、外来通院の〈出前〉。医療機関が病気や障害個所の治療を最優先するのに対し、自宅で暮らす安心感や快適さをそのままに治療が受けられるのが特色です。

「あおぞら診療所」は、研修医時代の仲間3名が〈技術優先のわが国の医療〉に疑問を感じ、「医師は、患者さんの生活、人生観にも思いを馳せる〈主治医〉であるべき」という内容の本を共同で出版。これが聖路加国際病院の名誉院長で、わが国医学界の最長老の医学博士・日野原重明氏の目に止まり、「理想に向かって頑張れ!」と励まされたのが設立のキッカケ。その後3人は、それぞれ8~10年の勤務医生活をしていましたが、そのうち「いったい我々はどんな医療をしてきたのか?」との反省の声が出て、「この辺で一緒に何かやろう」と、2年の準備期間ののち、平成11年4月松戸市上本郷に在宅医療（訪問診療）の拠点「あおぞら診療所上本郷」を、続いて平成16年11月には「新松戸」をオープンしたのです。

この3名とは、和田忠志医師(46)、前田浩利医師(46)、川越正平医師(42)で、現在前田医師は新松戸（常勤医師3名、非常勤1名、研修医1名）、また川越医師は上本郷（常勤医師2名、非常勤8名、研修医1名）のそれぞれ院長として活躍。この2拠点にはほかに看護師や理学療法士、ケースワーカーもいます。

また、和田医師はことし2月、郷里の四国・高知市に「あおぞら診療所高知潮江」を開業し「地域に根付いた町医者になりたい」とのかねてからの夢を実現しました。

## 患者の家族の健康にも気配り

松戸市内2拠点の「あおぞら診療所」が抱える在宅患者は松戸市を中心に約550人。患者さんとその家族と話し合いながら、医師、看護師、運転手でチームを組み、定期的に訪問、治療にあたっていますが、患者さんはもとより特に気を配っているのは、介護をしているご家族の健康。

在宅医療には家族の理解と協力が不可欠であり、訪問する医師にとっては〈良きパートナー〉。その家族が介護疲れから病気にでもなったら、その家庭は崩壊し、在宅医療は成り立ちません。したがって家族の健康も、患者さんの治療と同様に大切であり、休養や気晴らしへのアドバイスも忘れません。

この在宅医療のほか「あおぞら診療所」では、障害者支援を目的とした中核地域生活支援センター「ほっとねっと」の開設、家族に代わって患者さんの身のまわりのお世話をする「訪問看護」、リハビリテーション、大学の医学部からの学生実習の受け入れ、介護認定審査会、学校医、出版や講演活動など、その視野は大きく〈地域福祉〉に広がっています。

## 小児在宅診療が大きな課題

### ●前田浩利院長（あおぞら診療所・新松戸）の話

患者さんの人生観や生き方に寄り添った〈主治医〉になることをめざし、3人でスタートした在宅医療ですが、この10年間でそれぞれが拠点を持つほどに成長し、地域のために貢献できていることは、大変うれしいことです。

わが国の人口の高齢化は今後も進むことが予想され、在宅医療の必要性は一層高まってくるでしょう。同じ志を持った医師が、全国各地で旗揚げしてくれることを願っています。

私の当面の課題は、小児在宅医療の充実。小児がんや脳性麻痺などの子供さんを在宅で治療する医療機関が、わが国にはほとんどありません。そのため退院できずに、病院の天井をじっと見つめている子供さんを見るたびに「家庭で子供らしい生活を送らせてあげたい」と思います。

私どもでは、この分野には対象地域を松戸市周辺都市にも拡大して対応していますが、この小児在宅医療は今後ももっともっと普及させなければ——と痛感しています。

## あおぞら診療所の目標

- 患者さんの肉体的痛み、精神的痛み、社会的痛み、霊的痛みのすべてを癒す医療を目指します。
- 患者さんのいのちと生活を責任をもって守ることのできる医療を目指します。
- 市民の方々、行政、他の医療福祉機関とのネットワークをつくり、地域の医療、福祉の向上に貢献します。

編集  
後記



今回、え〜るちばのコーナーでも登場した作家の柳田邦男さんは、御自身の経験を基に人を対象とする専門職は、「自分」という一人称、「家族」という二人称のことを客観的に考えながら、三人称という「第三者」の立場から専門的判断を下せる〈2.5人称の視点〉を持つことが大切だ——と提唱しています。

p8でもご紹介した「あおぞら診療所」では、患者さんの人生にも思いを馳せた在宅医療が、まさに〈2.5人称の視点〉で展開されており、皆さんの笑顔が本当に「ざらり」と光り輝いていました。

詩人の茨木のり子さんは、「ざらりと光るダイヤのような日」という詩の中で、「世界

に別れを告げる日に人は一生を振り返って自分が本当に生きた日があまりに少なかった事に驚くだろう」と詩っています。「本当に生きた日」は人によって確かに違いますが、今号の取材を通じ、生きることの意味や生きることの大切さを考える良いキッカケとなりました。(安藤)